

部員と監督 つなぐ大役



全国高校野球選手権記念
第100回 南・北福岡大会
主催/朝日新聞社・県高野連

7日に開幕する南・北福岡大会。北福岡大会に出場する小倉工（北九州市）には、高校生ながら同じ野球部員を指導する「学生コーチ」がい



牧島監督からもらった木製バットでノックする上田君。ノックの技術は監督も認めている。北九州市小倉北区

る。病気をきつかけに入學直後から専任で務める上田真雄君（3年）。監督の代理もやっつてのけるほど信頼が厚く、いまも部員と監督をつなぐ架け橋として欠かせない。

「捕れるぞー」。6月7日夕、小倉工のグラウンドで守備練習する約70人の部員の中に、上田君がいた。三塁手、遊撃手、二塁手、一塁手。ノックでリズムよく、き

チームメートを指導する「学生コーチ」

小倉工3年 上田真雄君

わどいところに向け、木製バットを振る。牧島健監督(29)が指示したメニューをもとに練習を指揮。課題があれば注意したり助言したりする。

高校に進学するころ、甲状腺機能亢進症という病気になった。激しい運動をすると、呼吸困難になる。最初の練習で意識がもうろうとしたが、小倉から続ける野球にどうしても関わりたい。母親と一緒に監督に面会し、「マネージャーにしてほしい」と頼んだ。

監督にかけられた言葉は「学生コーチにならないか」。よくわからなかったが、ユニホームを着られると知り、「俺の居場所はどこしかない」と引き受けた。牧島監督は「強くなるためには厳しくしないとけない。僕の言葉を、そっと伝えてくれるコーチがほしい」と。

だが、練習に入ると、部員からも監督からも厳しい言葉を浴びた。下手なノックだと「どこ打つてる」。助言する

と「何でお前に言われるんや」。部員に気合が入っていないと、真っ先に監督から怒鳴られた。

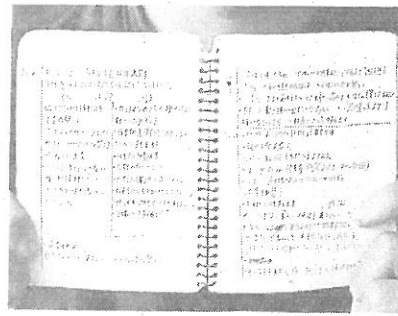
新チームになった昨年8

月、上田君ら2年生は恒例の企業へのインターンシップに参加。夕方の練習は身が入らず、監督は「やる気ないなら来んでいい」。しかし、2年生たちは「仕事してきたんやけ、きついのが当たり前や」と、監督の指導を離れて自主練習を1週間近く続けた。

上田君は、監督に謝るべきだと思った。だが、説得しきれず、部員は首を縦に振らなかった。きくしゃくして迎えた新人戦で小倉（北九州市）に0-12と七回コールドで大敗。学校に戻って部員たちはすぐにミーティングし、「変わらなきゃいけない」と反省を深めた。上田君の頭の中を「お前が一番に動かなきゃいけない」という監督の言葉が去来した。

その後、監督と部員のつなぎ役に徹することを決めた。ポケットに手のひらサイズのメモ帳を忍ばせ、試合や練習で監督がつぶやく言葉を漏らさず書き留めた。部員だけの

上田君のメモ帳には「強い打球を打っていく」「外野のカバーリング」など、練習で気づいた課題が赤や青のボールペンを使って書かれている。



ミーティングでその言葉を伝え、厳しく叱られて落ち込む部員とは一緒に改善策を考え

た。5月下旬、監督は2軍の2試合の指揮を任せた。上田君は「サインを出す立場になり、1プレーが流れを変えるところとわかった」。「1球の大切さ」を、より口酸っぱく言うようになった。

学んだのは、人の気持ちをくみ取り、正確に伝える力。3年間の集大成となる夏が迫る。甲子園でユニホームを着てノックする――。入学前には考えもしなかった夢を見て

いる。
(狩野浩平)